

平成 30 年 10 月

岡山大学薬学部 FD 白書

2017

目次

1. はじめに	1
2. 新任・転任教員のためのFD講習会	2
3. 授業改善のPDCAサイクル	2
3-1. シラバス	2
3-2. 教授法	6
3-3. 授業評価	11
3-3-1. 学生による授業評価（薬学版）	12
3-3-2. 同僚による授業評価	14
3-3-3. 自己による授業評価	15
3-3-4. 学生評価（全学版）と自己評価のクロス評価	17
4. FDフォーラムについて	18
5. おわりに	24

補足資料については、薬学部ウェブサイト学内限定ページで公開

補足資料1：学生による授業評価（薬学版）結果

補足資料2：同僚による授業評価結果

補足資料3：自己による授業評価結果

補足資料4：学生評価（全学版）と自己評価のクロス評価結果

1. はじめに

岡山大学薬学部では FD 活動の足跡を明文化し、これまでの FD 活動を見直すとともに、今後の FD 活動の礎にすべく、2008 年度（平成 20 年度）より FD 白書の作成を開始し、1 年ごとに追補版を作成してきた。これまで行われてきた FD 活動や FD 白書の作成は全国的にみても先駆的なものであり、薬学教育評価機構によるトライアル評価においても、高い評価を受けている。

薬学科 6 年制教育が導入され、4 年制・6 年制の並立、新カリキュラムへの移行、実務実習等の新たな教育カリキュラムの登場など、対応すべき種々の課題に対して、これまでの FD 活動を通じて全教員で議論を重ねてきた。6 年制教育が導入されてから 12 年、6 年制卒業生を輩出し始めてから 6 年が経過し、目的の異なる 2 学科が存在する中で教育を行うこと自体には教員も慣れてきたと思われる。しかしながら現状と過去の FD 白書を比較すると、問題点・改善すべき点として当時抽出されていた内容の中には、現在も同様の問題として捉えられているものも散見される。前回の追補版から年限が経過したこともあり、現在と過去を対比することで問題点・改善すべき点を今一度整理し、今後の FD 活動の指針とすべく、2017 年度（平成 29 年度）FD 白書を作成した。

2017 年度の FD 委員会構成員および活動内容は以下の通りである。

➤ 構成員

委員長：上田真史

委員：井上剛、神野伸一郎、高杉展正、竹内靖雄（50 音順）

➤ 活動

- ・FD フォーラム
- ・学生による授業評価（全学版）に基づくティーチング TIPS 作成
- ・学生による授業評価（薬学版）
- ・同僚による授業評価
- ・自己による授業評価

平成 30 年 10 月

上田 真史（FD 委員長）

2. 新任・転任教員のためのFD講習会

「新任・転任教員のためのFD講習会」は平成15年9月から始まり、新任あるいは転任教員が着任した年度に開催されてきた。この講習会では、本学部におけるFD活動の紹介はもとより、FD委員会として一貫して訴えている事柄についての理解と協力を求めている。

2017年度は2名の新任教員が着任したが、次年度4月にももう1名着任予定であるため、両者を対象に2018年度中に開催予定である。

3. 授業改善のPDCAサイクル

本学部授業は、Plan, Do, Check, Actionを取り入れたPDCAサイクルによって改善を目指している。本委員会では、シラバス(P)や教授法(D)はもとより、評価(C)に特徴的な戦略を立案し、PDCAサイクルの中で最も重要な鍵を握るAction部位の重点化を明示させることによって、次世代サイクルへの円滑な移行をサポートしている。(2008年度FD白書から再掲)

3-1. シラバス

2011年度FD白書(追補版)によると、2011年度版シラバスから全学統一フォーマットが採用された。2012年度版シラバスからは薬学教育評価機構のトライアル評価に基づいて、授業目標の書式・授業内容・評価方法について一定のガイドラインが設定され、統一が図られた。

【基本方針】

- ・学習者を主体(主語)にした、分かりやすい表現のシラバスを作成する。
- ・薬学科のシラバスではコアカリキュラムを意識した内容とする(各授業回のSBOの明記)。
- ・成績評価基準の記述はできるだけ曖昧さを排除する。

その後、教務委員会による全シラバスの確認と修正指示を毎年実施し、また、2017年度版シラバスからは全学統一フォーマットも改変されたことにより、現在の薬学部のシラバスは統一性の高いものとなっている。さらに、実習など試験によらずに成績評価を行う授業科目については、態度・技能などを評価するためのルーブリックを作成し、それをシラバスからリンクさせることで、学生にも評価基準を周知している。具体例として、創薬科学科4年生および薬学科5・6年生配当の卒業論文実習のシラバスとルーブリックを3~5ページに示す。

卒業論文実習を評価するためのルーブリックは、ルーブリック評価とスケール評価を混合したもので、評価を行いやすいようにした岡山大学薬学部独自のものである。

🔍 シラバス参照

授業基本情報

講義番号	082971
授業科目	卒業論文実習（卒業制作物を含む。）
担当教員（所属）	各教員（08：薬学部）、竹内 靖雄（08：薬学部）
学期	2017年度 Q：特別
曜日・時限	
単位数	12
教室	未定／別途指示
ナンバリングコード	NDAZ2PHPZ6001N
印刷用ページ	https://gs.okayama-u.ac.jp/campusweb/campusquare.do?_flowId=SYW4101101-flow&nendo=2017&shozoku=0841&jikanwari=2971&sylocale=ja_JP
科目区分	専門科目
対象学生	5,6年次（薬学科）
必修・選択の別	必修
連絡先	各担当教員の電話番号・Eメール
オフィスアワー	各担当教員にアポイントをとること。
学部・研究科独自の項目	【主責任科目のSBO】すべてのSBO
使用言語	日本語
授業の概要	「研究とは何か」の解を求めべく、専門領域の研究を行う。研究結果は、「卒業研究発表会」（発表要旨）および「卒業論文」として明文化する。
学習目的	該当なし
到達目標	薬学の知識を総合的に理解し、医療社会に貢献するために、研究課題を通して、新しいことを発見し、科学的根拠に基づいて問題点を解決する能力を修得し、それを生涯にわたって高め続ける態度を養う。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 担当指導者から課題が提示されるが、卒業研究の一般目標は以下になる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 将来、研究活動に参画できるようになるために、必要な基本的理念および態度を修得する。 ・ 将来、研究を自ら実施できるようになるために、研究課題の達成までの研究プロセスを体験し、研究活動に必要な基本的知識、技能、態度を修得する。 ・ 研究活動を通して、創造の喜びと新しいことを発見する研究の醍醐味を知り、感動する。 ■ 成績評価基準は、ルーブリックとして公開している。http://owl.pharm.okayama-u.ac.jp/edu/rubric/data/083971.pdf ■ 全履修者およびそれらの指導者が参画の公開「卒業研究発表会」を教務委員会主催で開催する。本発表会は、その研究内容が6年制薬学科の卒業論文として適合しているかどうかを第三者に問う審査会とする。実施要領の詳細については、追って連絡する。
授業計画	【予習】 各授業の内容について教科書等で予習しておくこと。 【復習】 教科書・参考書・配布プリント・講義資料システム・授業の撮像映像を活用して復習すること。 【成績評価への反映】 予習・復習による成果物については評価には特に反映しない。 しかし、薬学部の授業を理解するためには予習・復習の積み重ねが大切である。授業中に板書やスライドを写したノートを復習段階で自分なりに主体的にまとめたノートを作る等、日頃から授業概要を掴もうとする努力が試験対策へとつながる。
授業時間外の学習（予習・復習）方法（成績評価への反映についても含む）	
授業形態	(1)割合 講義形式：0% 講義以外（演習） 20% 講義以外（実験・アクティブラーニング等） 50% 講義以外（データ解析・論文作成等） 40% (2)講義形式以外の内容 ディスカッション あり グループワーク あり プレゼンテーション あり 学内実習・実験 あり 学外実習 あり その他：

(3)履修者への連絡事項

何らかの配慮が必要な場合は履修登録前に担当教員に相談してください。

スライドあり、板書あり ※ただし講師によって異なる。

使用メディア・機器

【履修者への連絡事項】

何らかの配慮が必要な場合は履修登録する前に担当教員に相談して下さい。

教科書

【教科書】

各指導教員により、必要に応じて指定されることがある。

参考書等

【参考書等】

各指導教員により、必要に応じて指定されることがある。

成績評価

【評価方法・評価基準】

・540時間（12単位×3時間×15回）以上の研究時間が証明できるものがあること(提出を求められることがある)

・卒業論文発表会要旨」が提出されていること（指導者から承認を得たもの）(25点)

・「卒論論文」が提出されていること（指導者から承認を得たもの）(25点)

・ループリック評価」(50点)

・上記資料とともに取り組む姿勢や発表能力等で判断する。

【評価者】授業担当教員（配属研究室の指導教員）

【評価時期】6年次12月

【ループリックURL】<http://owl.pharm.okayama-u.ac.jp/edu/rubric/data/083971.pdf>

担当教員の研究活動との関連

【研究活動との関連】

各担当教員は、薬学の研究を行っている。本実習は、各担当教員の専門分野である薬学の研究基礎部分を教示するものである。

受講要件

【基礎となる授業科目】全履修科目

他学部学生の履修の可否

否

教職課程該当科目

この項目は当該科目には該当しない

J A B E E との関連

該当なし

備考／履修上の注意

■発表様式は、前年度と異なる可能性があるので、掲示・案内に注意を払うとともに、4月初頭のオリエンテーションには必ず出席すること。

■必修科目であることに留意し、成績評価エビデンスの作成に失念なきよう、務められたい。

■履修登録は6年次に卒業論文発表会後、薬学部教務学生担当で行うので学生は履修登録しないこと。

【発展する授業科目】最終科目である。

コンピテンシー

人間性・倫理観に富む教養【教養】

汎用的な知識と技能に基づく専門性【専門性1】

医薬品に関わる専門性と実践的スキル【専門性2】

臨床研究に関わる専門性【専門性3】

情報を的確に収集・活用できる情報力【情報力】

30%

時代と社会をリードする行動力【行動力】

30%

生涯に亘る自己実現力【自己実現力】

40%

関連割合の合計

100%

卒業論文実習 (薬学科5, 6年次, 創薬科学科4年次対象)

評価基準項目	3:よくできている 2:どちらかというとできている 1:どちらかというとできていない 0:できていない	A	B	C	D	E
基本的事項	① 研究室員としてのルールやマナーを守り、周りとの協調性を持って研究に取り組む ② 相手の視点に立って相手の考え方や感情を理解する(共感力を有する)。 ③ 研究活動の状況や生じたトラブルを指導者や研究室員に適宜報告・相談し対処する。 ④ 研究の各プロセスを正確かつ丁寧にノートなどの媒体へ記述し、保管する。	12-10点	9-8点	7-6点	5-4点	3-0点
実践的事項	① 研究倫理を遵守し、研究に取り組む。 ② 研究活動に関わる諸規則や指針を理解したうえでそれらを遵守し研究に取り組む。 ③ 研究活動を通じて、創造の喜びと新しいことを発見する研究の醍醐味を知り、感動する。	9-8点	7-6点	5-4点	3-2点	1-0点
計画	① 研究テーマの背景や意義を理解する。 ② 研究テーマに関連する知識を能動的に得る。 ③ 得られた知識から論理的な研究プロセスを組み立てる。 ④ 研究テーマにおける問題点(課題)を抽出する。 ⑤ 問題点(課題)を解決するための適切な研究方法を立案する。	15-12点	11-10点	9-8点	7-5点	4-0点
実験	① 研究に用いる薬品, 器具, 機器等を正しく取扱い, 管理する。 ② 的確な研究手技を修得し, 正確に研究を遂行する。 ③ 得られた実験結果が合目的であるか客観的に判断する。 ④ 得られた結果を適切な形式で図表やグラフなどにまとめる。 ⑤ 適切な記述がされた実験ノートなどの媒体を作成する。 ⑥ 得られた研究結果における問題点を見だし, 適切に改善する。	18-16点	15-13点	12-9点	8-5点	4-0点
まとめ・考察・発表	① 得られた研究成果を適切に説明する。 ② 得られた成果が示唆する事柄について, 先行研究を適切に引用しながら, 論理的に考察する。 ③ 研究の成果を発表し的確に質疑応答する。 ④ 得られた研究成果を論文として纏め上げる。 ⑤ 得られた研究成果に基づいて, 次の研究課題を提案する。	15-12点	11-10点	9-8点	7-5点	4-0点
その他 (評価者独自の項目)	評価者が作成	評価者が作成	評価者が作成	評価者が作成	評価者が作成	評価者が作成

3-2. 教授法

2008年度FD白書で述べられているように、薬学部では教員免許をもたない教員が殆どであり、教授法についての研修の重要性は極めて高い。FD委員会では、他の教員の授業を参観することが最も効果的な教授法改善策であるという考え方のもとに、1) 全専門科目を公開授業とし、2) 授業参観、あるいは同僚評価という形式で他の教員の授業を参観する機会を増大させることに注力してきた。しかしながら2011年度FD白書(追補版)では、授業参観報告書制度の中断(平成23年度現在)が記載されている。

これに対し薬学部では、学生の予・復習に役立てるため、2014年から授業撮像システムを整備し、パスワードを入力すれば任意の場所・時間に視聴できる授業ライブラリを構築してきた。経年的に登録授業数が増え、学生への周知も進んだことから、2017年度は年間40万件以上のアクセスがあった。7ページに月ごとのアクセス数を示すが、試験期間である5~6月、7~8月、11月および1月には顕著にアクセス数が増加しており、3-3-1の結果と併せて考えると、定期試験対策に有効活用されていることが見てとれる。

年度	アクセス数合計
2014	1,245
2015	26,749
2016	224,150
2017	404,282

「任意の時間に視聴できる」のは教員による授業参観・同僚評価の面でもメリットであり、ここ数年は年間10件程度の授業参観が行われている(2017年度に関する詳細は3-3-2を参照)。

また授業評価アンケート(全学版)の各設問に対し、80%以上の学生が「優れている」と判断した授業担当者にその理由や心がけていることを質問してティーチングTIPSを作成し、全教員に配布することで、学生の満足度が高くなる教授ノウハウを共有している。8~10ページに具体例を示す。

薬学部授業ライブラリ閲覧回数(総アクセス数+月間上位3講)

年度	月	総アクセス数	授業科目名(1)	回数	授業科目名(2)	回数	授業科目名(3)	回数
2014	4月	1		0		0		0
	5月	779	有機化学I	46	有機化学I	24	病気を知る	20
	6月	318	有機化学I	24	分子細胞生物学I	18	有機化学I	15
	7月	10	分子細胞生物学I	6	有機化学I	5	病気を知る	2
	8月	10	分子細胞生物学I	6	有機化学I	2	病気を知る	2
	9月	12	有機化学I	3	分子細胞生物学I	2	病気を知る	1
	10月	4	有機化学I	2	分子細胞生物学I	2	病気を知る	2
	11月	2	有機化学I	2	有機化学I	1	分子細胞生物学I	1
	12月	35	分子細胞生物学I	1				
	1月	1						
	2月	13	分子細胞生物学I	2	有機化学I	2		
	3月	60	有機化学I	5	分子細胞生物学I	4	有機化学I	4
2015	4月	979	有機化学I	77	分子細胞生物学I	39	有機化学III	28
	5月	1,136	有機化学I	14	有機化学III	12	物理化学III	10
	6月	336	医薬品構造解析学	24	有機化学III	12	有機化学I	10
	7月	639	有機化学I	55	医薬品構造解析学	20	有機化学I	18
	8月	1,785	製剤学	15	有機化学III	14	有機化学I	13
	9月	1,652	医薬品構造解析学	49	有機化学I	19	薬学ガイダンス	18
	10月	773	微生物学	24	製剤学	9	薬物療法学	7
	11月	7,913	薬物療法学	39	製剤学	31	有機化学I	31
	12月	798	微生物学	24	有機化学I	11	微生物学	24
	1月	504	医薬品構造解析学	14	薬理学	6	薬物療法学	4
	2月	8,396	薬物療法学	6	薬物療法学	6	薬物療法学	4
	3月	1,838	有機化学III	10	微生物学	6	総合薬学演習	3
2016	4月	20,639	実習基本実習	129	有機化学1	51	総合薬学演習	44
	5月	38,223	有機化学1	123	有機化学1	85	有機化学1	68
	6月	24,881	有機化学III	83	有機化学III	68	有機化学III	66
	7月	36,449	製剤学	48	有機化学2	43	有機化学2	43
	8月	8,230	物理化学II	12	微生物学2	8	微生物学2	8
	9月	2,770	実習基本実習	8	有機化学演習I	8	有機化学III	8
	10月	11,714	化学療法学	27	薬理学I	27	化学療法学	57
	11月	38,010	化学療法学	59	化学療法学	57	化学療法学	55
	12月	5,223	薬理学I	11	有機化学3	11	化学療法学	11
	1月	20,023	化学療法学	51	化学療法学	42	化学療法学	39
	2月	14,899	化学療法学	29	化学療法学	24	化学療法学	23
	3月	3,089	薬理学II	7	薬理学II	6	免疫学I	5
2017	4月	29,763	有機化学1	47	基礎物理学	46	微生物学2	39
	5月	63,193	微生物学2	82	物理学4	66	物理学4	64
	6月	58,562	微生物学2	60	有機化学1	58	有機化学1	45
	7月	65,977	物理化学5	101	物理化学5	83	物理化学5	42
	8月	37,690	生物有機化学	32	生物有機化学	17	生物薬剤学	17
	9月	1,579	物理化学2	7	物理化学2	3	物理化学2	3
	10月	16,837	薬理学1	25	物理化学2	21	薬理学IV	20
	11月	49,254	物理化学2	41	医薬化学1	31	物理化学2	27
	12月	7,939	製剤学	14	薬理学2	13	放射薬品学2	12
	1月	61,603	薬物動態学	45	薬理学2	39	薬物動態学	38
	2月	7,534	医薬化学2	12	医薬化学2	11	医薬化学2	10
	3月	1,262	薬物動態学	5	基礎物理学	4	生物統計学	3

平成29年度第3・4学期授業評価アンケート集計結果に基づくティーチング TIPS
(80%以上の学生が「優れている」と判断した授業担当者に聞いた理由・コツ)

シラバス記載の学習目標の達成

- ・ 授業内容を講義初回に話し、その流れを守るように心がけている。
- ・ 課題解決型のポートフォリオの作成を義務付け、学習到達目標に達するように学生に作成させるので、必然的に達成感が出る。
- ・ 学習目標は授業の目的に沿って絞り、かつ明確にして、各講義において常にそのことを意識するよう心がけている。
- ・ 初回授業にて、本授業の獲得目標をヒューマニズム教育の根幹に位置づけて救急・災害実臨床での実例をもとに解説している。
- ・ シラバスの学習目標を達成できるように、教科書の中で必ず理解してほしいポイントを伝える。
- ・ 授業終わりに学習目標に準じたミニテストを実施した。

授業の内容

- ・ 構造式、反応機構の矢印を学生が自分で描くことを重視して、板書で講義を行っている。
- ・ 分かりやすい授業になるように心がけている。
- ・ 医学科の学生と一緒に人体解剖実習を行うという未体験に触れることが大きい。
- ・ 自己学習を課すことで、これだけのことをやったという達成感を学生に感じさせている。
- ・ 昨年度、初めて責任者として担当し、新たに授業を担当する教員も加わったので、従来の内容を見直し、疾患分野は一通り網羅するよう広げつつも、扱う疾患は病態の理解と治療学的に重要なものに絞るよう取捨選択した。
- ・ SBO および教科書に準拠し、基礎的内容を授業した。

教員の話し方

- ・ 落ち着いて話すように心がけている。
- ・ 聞き取りやすい音量・スピードで話すように努力している。
- ・ あまり意識していないが、学生が眠くならないように抑揚をつけて話している。
- ・ 決して大きくしているつもりはないが、大きな声で話している。

教員の説明のわかりやすさ

- ・構造式、反応機構の矢印を学生が自分で描くことを重視して、板書で講義を行っている。
- ・論理的に説明するように心がけている。
- ・講義資料（講義2～3回分のプリント）の内容にそって、学生が記入できる速度で説明している。
- ・疾患の疫学・病態・検査・診断・治療・予後など、基本的な項目を意識しつつもポイントを絞り明確な解説となるよう心がけた。特に治療法（薬物療法）については、これまでの開発の歴史や将来の方向やニーズを含め学生の興味を惹くよう心がけた。

板書

- ・書くことで理解が深まるような板書をするように心がける。
- ・重要事項のみ板書し、それほど重要でないことは板書せずにスライドでの説明に留めるなどメリハリを意識している。

スライドや教材提示の速度

- ・スライドで図を提示してその説明を板書しているが、ほぼすべての人が書き写したことを確認してから口頭で補足説明を加えている。
- ・講義時間を考慮したスライド枚数、各スライドにおける文字数、情報量に注意した。
- ・学生の様子を見ながら、書き写したりメモをとっている場合には、少し待つようにした。

教材（教科書やプリントなど）

- ・かなり詳しい講義資料（各ページに図表を適当に掲載）を作成し、2～3回分をまとめてプリントとして配布している。毎回講義終了時に演習問題を行い、その講義の要点を整理している。
- ・板書内容を記入できる十分な余白を設け、参照すべき教科書のページも明記した配布資料を作成している。
- ・提示したスライドは原則として全てプリントとして配布している。全てカラー印刷で可能な限り大きく読み易く、を心がけた。
- ・プリントを授業の進行に沿った内容とし、復習がしやすいように、対応する教科書のページを記したり、要点をまとめたりした。
- ・教科書の内容をまとめたプリントを配布している。

授業のスピード

- ・情報を詰め込み過ぎずに、授業時間の中で学生が理解可能なスピードを心がけている。
- ・板書を書き写し終わったことを確認してから口頭説明を行っている。
- ・講義内容を各分野で重要なものになるべく絞り、ポイントをおさえて解説するよう心がけた。
- ・メモをとってほしいところはゆっくり話している。

授業内容の分量

- ・情報を詰め込み過ぎずに、授業時間の中で学生が理解可能な範囲の分量を心がけている。
- ・毎回、講義資料4～5ページ分で授業を行っている。
- ・伝えられる範囲の分量で講義している。
- ・しっかりと復習すべき重要点を強調するとともに、発展的な内容については短い説明に留め、その旨を明言している。

自習方法の指示

- ・プリントの最後に重要用語と復習ポイントをまとめて示し、学生にはそれらの事項を丸暗記するのではなく、第3者に対して説明できるようになるまで理解するよう指示している。そして、説明ができない事項から優先して、教科書やプリントを見直し、概念を整理するようにアドバイスしている。

教員の熱心さ

- ・オムニバス形式で新たに授業を担当する教員が複数いたこと、各担当教員の専門分野が中心であったこと、学生（受講者数）は少数であったが熱心であり、お互いに顔が見える距離で講義ができたので教員側のモチベーションアップにもつながったこと、などが考えられる。
- ・どの授業でも熱意は注いでいる。
- ・声が大きいと熱心に聞こえるといった心理的効果があるらしいので、そのせいかもしれない。

私語対策

- ・ちょっと怖そうな雰囲気を漂わせる。

受講生同士のコミュニケーション

- ・SDGによるTBLなので、学生間のコミュニケーションが良好であるのは自明です。
- ・臨床上の問題解決において、できるだけグループ討論（2～3人や6～7人）ができるよう時間（課題）を設けた。

教員とのコミュニケーション（授業中）

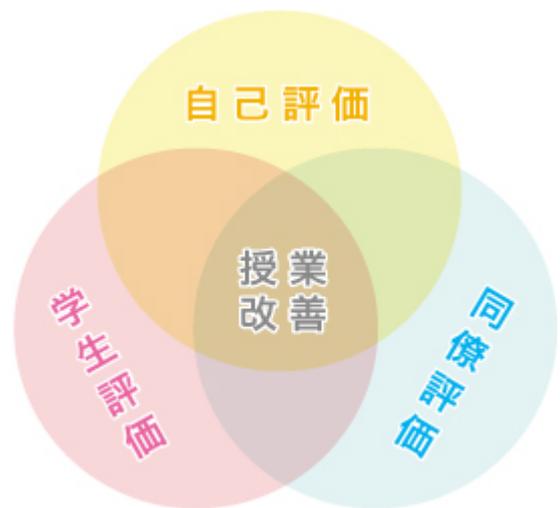
- ・毎回、全学生に話しかける（問いかける）ように心がけた。

3-3. 授業評価

岡山大学では、全学のFD委員会主導で、授業評価アンケートがほぼ全ての講義を対象に実施されている。2011年度FD白書（追補版）には、「これはマークシートを用いたものであるが、学生番号を記載する必要がある、匿名回答はできない」との記載がある。これについて授業評価アンケートを所管する学務企画課に問い合わせたところ、「履修登録している学生からの回答かどうかを把握するため、学生番号のマーク欄を設けているが、教員・事務とも個別回答を把握できる仕組みにはなっていない」との回答を得た。少なくとも2017年度においては、実態としては匿名アンケートとして実施されていたようであるが、学生がそう理解していなければ付度を含む結果となっている可能性も考えられる。2018年度からは回答方式がマークシートからウェブに変更になるが、回答用のサイトにアクセスするために個人IDとパスワードでのログインが求められるため、回答内容と個人が紐づけされることが無い旨を改めて周知徹底する必要がある。

薬学部FD委員会では、「学生」「同僚」「自己」の3者による授業評価を行い、多角的な観点からそれぞれの授業に潜む問題点を抽出し、改善につなげる活動をこれまでに行ってきた（右図）。

「学生評価」に関しては、全学アンケートでは収集できない情報を得るために、独自のアンケートを半期ごとに実施している。過去の例では、学生が満足、あるいは不満をもった科目をあげさせ、当該科目が選択された理由を尋ねることにより、より分かりやすい教員へのフィードバックを得ることに成功している。2017年度には、学生の予・復習に関する設問でアンケートを実施した。また、「同僚評価」、「自己評価」についても継続的に実施している。自己評価についてはともすれば形骸化した回答になるため、2015年度からは学生評価と自己評価のミスマッチを抽出するクロス評価を新たに始め、各教員にフィードバックすることで授業改善を支援している。



3者評価に基づく授業改善の概念図

3-3-1. 学生による授業評価（薬学版）

2017年度は学生の予・復習状況を把握するためのアンケートを実施した（13ページ）。今年度から初めてウェブでアンケートを実施した。Google フォームでアンケートを作成し、大学から学生個々に付与されている Gmail アカウントでログイン後に回答させることで、1人から複数回の回答を制限した。学生にとっても教員にとっても初めての試みであったが、トラブルもなく完了し、紙アンケートに比べて結果集計に割く労力が大幅に削減でき、非常に有効であった。

結果は補足資料1に示す。1～3年生は学年が上がるとともに、予・復習する割合が下がっていくのは憂うべき結果と言える。7ページに示した授業ライブラリ閲覧回数によれば、4月に最も閲覧されているのは有機化学1、ついで基礎物理学である。これらはともに1年生担当科目であり、閲覧回数から考えると一部の学生に限られるかもしれないが、定期試験とは無関係に予・復習しているものと思われる。4・5年生は薬学科を対象とした臨床系の授業が主であり、自身の興味と授業内容が合致するためか、半数程度の学生が予習をして授業に臨んでいるのはいい傾向である。ただし、講義後に復習する割合は逆に下がっており、原因を調査する必要がある。

この内容でアンケートを実施したのは2017年度が初めてであったため、次年度以降も継続してアンケートを実施し、経時変化を分析する予定である。

2017 1-2 学期 学生による授業評価アンケート(1年生)

*必須

講義の予習はどれくらいしていますか。 *

- 例題を解くなど深く予習している
- 授業の範囲内を一通り、目を通すぐらいである
- 予習はしない

講義の復習はどれくらいしていますか。 *

- 講義が終わったその日や数日以内に復習している
- テストの前にのみ復習している
- 復習はしない

講義の予習や復習について意見や要望があれば自由に回答ください。

回答を入力

講義のビデオ(撮像)を復習や試験対策に活用したことはありますか? *

- 活用した
- 活用したことがない
- ビデオの存在を知らなかった

講義のビデオ(撮像)は復習や試験対策に役立ちましたか? *

- 役に立った
- どちらともいえない
- 役に立たなかった

1学期のベストクラスをあげてください。 *

- 基礎物理学 (須藤、安井、山下、井上、上田)
- 基礎生物学 (表)
- 薬学ガイダンス
- 薬用植物学 1 (波多野、谷口)
- 植物資源科学 1 (波多野、谷口)
- 有機化学 1 (竹内)
- 分析科学 1 (御船)
- 早期体験実習 (四宮、小山、須野)
- 薬学セミナー

1学期のベストクラスを挙げた理由について、授業科目名を記し、自由に回答ください。

回答を入力

3-3-2. 同僚による授業評価

全教員に対し、下記に示す内容で同僚評価を依頼した。授業撮像システムの導入により、教員も任意のタイミングで撮像データを視聴し、同僚評価を行うことができるようになった。2017年度には11件の同僚評価が行われたが、すべて動画視聴によるものであった。結果は補足資料2に示す。

科目名		担当教員名	
参観・閲覧日時		参観・閲覧場所	
参観・閲覧者名		参観・閲覧時間	分

以下の質問事項は、自己調査アンケートあるいは学生評価アンケートの質問項目です。ご参考にしてください。

- (1) 学生の声を取り入れる双方向性システムを採用していた。
- (2) 学生の興味をひく工夫がなされていた。
- (3) 学生が授業に集中できるように配慮されていた。(冷暖房の調整, 私語の注意等)
- (4) 資料の配布は適切であった。
- (5) 板書や視聴覚機材の利用は適切であった。
- (6) 声の大きさが適切であった。
- (7) 話のスピードが適切であった。
- (8) 字の大きさが適切であった。

1. 本公開授業を受講した感想をコメントしてください。
好印象を与えた点

改善を求めたい点

全体的感想

2. 本公開授業を受講され、今後のご自分の授業に取り入れたいと思われた教授法について、コメントしてください。

3-3-3. 自己による授業評価

全教員に対し、下記に示す内容で自己評価を依頼した。2017年度1・2学期（前期）に開講された授業は53科目であり、うち23科目に対して回答があった。3・4学期（後期）に開講された授業は49科目であり、うち27科目に対して回答があった。結果は補足資料3に示す。それぞれの項目に対して、何名かの教員は「改善が必要」と考えており、次年度以降に改善が認められるか（少なくとも改善しようとする取り組みがあるかどうか）を追跡する必要がある。

授業科目名 (授業科目毎に回答)	授業回数 (授業回数は、1回60分で計算)	担当教員名 (教員毎に回答)
	当該授業の総回数 ()	
	担当した授業回数 ()	

授業の半分以上で講義したものに関して記載して下さい。なお、実習系授業（学生実習・事前学習）は回答の必要はありません。

○ 2年生以下の講義では、クォーター毎に回答し、120分×6回相当の講義なら「120分3回以上を担当した講義」に関し回答。

○ 3年生以上の講義では、前(後)期毎に回答し、120分×12回相当の講義なら「120分6回以上を担当した講義」に関し回答。

また受講者数が10名以下の講義に関しては、回答の必要はありません。

1. 初回の授業で、授業計画と講義内容（およびその変更）について説明しましたか。

はい いいえ

2. 以下の項目について、自己評価を教えてください（当てはまるものにチェックして下さい）。

なお、下記項目は「学生による授業評価アンケート(全学)」と対応しております。

	問題が無い	改善が必要	当てはまらない
a. シラバス記載の学習目標の達成	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
b. 授業の内容	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
c. 教員の話し方	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
d. 教員の説明のわかりやすさ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
e. 板書	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
f. スライドや教材提示の速度	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
g. 教材(教科書やプリントなど)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
h. 映写・音声教材	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
i. 授業のスピード	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
j. 授業内容の分量	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
k. 自習方法の指示	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
l. 教員の熱心さ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
m. 私語対策	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
n. 受講生同士のコミュニケーション	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
o. 教員とのコミュニケーション(授業中)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
p. 教員とのコミュニケーション(授業外)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
q. 学生参加の度合い	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
r. 成績評価の方法	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

3-3-4. 学生評価（全学版）と自己評価のクロス評価

本評価は、学生評価と自己評価のミスマッチを調べたものである。自己評価アンケートは、学生評価（全学版）の設問に対して、「問題なし」か「改善が必要」を教員が回答する形式である。学生評価アンケートで「優れている」の選択率が50%未満であっても、教員が「問題なし」と回答した場合には、学生と教員間の意識に乖離（ミスマッチ）が認められると判断し、教員側に意識改革を促す目的で実施している。諸事情により2017年度には実施しなかったため、2016年度の結果を補足資料4に示す。

2015年度から本評価を実施したところ、毎回「問題なし」と自己評価していた教員が「改善が必要」を選ぶようになるなど、自身の授業の振り返りを促進し、自己評価の形骸化に歯止めをかける役割を果たす結果が得られた。しかしながら、2018年度からは学生評価（全学版）アンケートがウェブで実施されるようになり、教員はその結果をリアルタイムで知ることができるようになった。これは結果集計の手間が簡素化され、学期ごとの授業が終了した直後に学生からのフィードバックを得られるというメリットがある一方、学生と同じ設問で教員が自己評価するタイミングが失われてしまうことを意味する。ウェブアンケートに対応して、自己評価の形骸化を避けるための方策を新たに考案する必要がある。

4. FD フォーラム

2017年度には下記に示す3回のFDフォーラムを実施した。なお参加者数には、撮像データを視聴してレポートを提出した者を含んでいる。

平成29年10月17日（火）16:30～18:00

「ライフサイエンス研究分野におけるコーチングの必要性」

【講師】東京医科歯科大学 竹本佳弘 特任教授

参加者は33名。コーチングの定義や必要性などの解説から始まり、東京医科歯科大学の授業への導入例、その評価法などについて説明を受けた。相手が答えを自分で見つけられるように導くのがコーチングであり、ティーチングやカウンセリングとは異なるものである、研究室においては教員は○○ingを複数組み合わせることで研究指導を行っている、などは納得できる内容であった。一方で、コーチングが全く奏効しないタイプの学生もいるとのことで、万能ではないことを知ることも出来た。

平成30年2月9日（金）16:30～18:00

「薬学英語プレゼンテーションスキル講座」

【講師】静岡県立大学 薬学部 フィリップ ホーク (Hawke, Philip) 准教授

大学院生にとっても有意義なテーマであると考え、学生・教員共同参加のFDフォーラムとして実施した。教員の参加を任意としたため、参加者は15名と通常のFDフォーラムよりも少なかったが、学生も10名程度参加し、講師からのプレゼンテーションTIPSに対して、お互いを交えて意見交換を行った。

平成30年3月20日（火）16:00～17:30

「薬学教育の過去・現在・未来（2）ー 学部入試から薬学教育評価まで ー」

【講師】竹内教務委員長・薬学教育評価委員長、黒崎教育担当副学部長

参加者は29名。黒崎教育担当副学部長より、大学全体および薬学部で実施されているグローバル教育に関連するプログラムの説明を受けた。竹内教務委員長より、2019年度（平成31年度）入学生への適用に向けて、現行カリキュラムの改定を計画していること、およびその趣旨（薬学科配当の必修科目の精査・削減、1年生1学期で大学での学び方を学ばせる）の説明を受けた。また、竹内薬学教育評価委員長より、第2期薬学教育評価に向けての資料作成スケジュールや分担についての説明を受けた。

これまでに開催したFDフォーラム一覧

回	日時	内容
1	平成 15 年 9 月 1 日(月) 13:30~15:30	<ul style="list-style-type: none"> ●新人教員のための講習会 <ul style="list-style-type: none"> ・「カリキュラムとは」 講師 竹内靖雄(FD委員会委員) ●教育を考えるフォーラム <ul style="list-style-type: none"> 総合司会 岡本敬の介(FD委員会委員長) ・「シラバスを考える」 話題提供 竹内靖雄 ・「教授法・勉学環境を考える」 話題提供 岡本敬の介 ・「授業評価を考える」 話題提供 綿矢有佑
2	平成 16 年 9 月 1 日(水) 13:30~15:30	<ul style="list-style-type: none"> ●新人教員のための講習会 竹内靖雄(FD委員会委員) ●教育を考えるフォーラム 「達人に学ぶ」 <ul style="list-style-type: none"> 総合司会 齋藤 寛(FD委員会委員長) ・達人 亀井千晃教授 ・達人 川崎博己教授 ・達人 勝 孝 助教授 ・達人 吉田隆志教授
3	平成 17 年 9 月 28 日(水) 13:30~15:30	<ul style="list-style-type: none"> ●新人教員のための講習会 竹内靖雄(FD委員会委員) ●教育を考えるフォーラム 「共用試験を考える」 <ul style="list-style-type: none"> 総合司会 佐々木健二(FD委員会委員長) ・話題提供 <ul style="list-style-type: none"> 「共用試験について」 木村聰城郎 教授 「CBTについて」 成松 鎮雄 教授 「OSCEについて」 黒崎 勇二 教授 ・総合討論
4	平成 18 年 9 月 27 日(水) 15:30~18:00	<ul style="list-style-type: none"> 総合司会 佐々木健二(FD委員会委員長) ●新人教員のための講習会 竹内靖雄(FD委員会委員) ●教員組織の変更について 木村聰城郎薬学部長 ●メンタルヘルスとその支援 <ul style="list-style-type: none"> 【話題提供】教育実践総合センター 塚本千秋 先生 【総合討論】
5	平成 19 年 3 月 8 日(木) 13:00~16:30	<ul style="list-style-type: none"> ●「チュートリアル授業の理解のために」 <ul style="list-style-type: none"> 総合司会 佐々木健二(FD委員会委員長) ●「ミニワークショップ」 <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップとは・問題提起・SGD・ミニレクチャー・SGD・発表・全体討議 【タスクフォース】医学部医学科 大塚愛二 先生
6	平成 19 年 6 月 26 日(火) 14:00~16:00	<ul style="list-style-type: none"> ● 「学生のメンタルヘルス」 <ul style="list-style-type: none"> 講 師 保健環境センター 大西 勝 先生

7	<p>平成 19 年</p> <p>9 月 10 日(月)</p> <p>13 : 00~17 : 30</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「新任教員のための F D 講習会」 ● 「ミニワークショップ」 <p>タスクフォース F D 委員会委員</p> <p>・ワークショップとは・ S G D : 良いシラバスとは・ S G D : 良い授業とは・ S G D : 正しい授業評価とは・全体討議・感想</p>
8	<p>平成 20 年</p> <p>9 月 24 日(水)</p> <p>9 : 00~12 : 30</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「C B T 試験問題作成と精選」 <p>薬学部 C B T 委員会主催</p>
9	<p>平成 20 年</p> <p>10 月 22 日(水)</p> <p>15 : 00~17 : 30</p>	<p>総合司会 佐々木健二(F D 委員会)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●新任・転任教員講習会 竹内靖雄(F D 委員会) ●ハラスメントを防ぐには 埴岡伸光(学生生活委員) ●高校との信頼関係を構築するには <p>【話題提供】ベネッセコーポレーション 木野内俊典先生</p>
10	<p>平成 20 年</p> <p>12 月 11 日(木)</p> <p>16 : 00~17 : 30</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●学生参画フォーラム <p>テーマ 新しい授業を創ろう</p> <p>対 象 薬学部 2 年次生</p> <p>方 法 アンケート結果に基づき、薬学部に必要なとされる新授業を創る。</p> <p>連 絡 薬学部学生・教員 F D 検討会 杉本</p>
11	<p>平成 21 年</p> <p>4 月 3 日(金)</p> <p>13 : 00~16 : 00</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●有効な S G D (スモールグループディスカッション) 実施に向けて <p>ワークショップ</p> <p>【タスクフォース】黒田・名倉・四宮・北村(佳)</p>
12	<p>平成 21 年</p> <p>5 月 28 日(木)</p> <p>16 : 00~17 : 30</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●薬学部耐震改修構想における philosophy - F D の観点から見る新薬学部棟における研究・教育の新展開- <p>【話題提供】改修 W G 委員 成松</p> <p>【質疑応答】改修 W G 委員 成松・忠田</p>
13	<p>平成 21 年</p> <p>10 月 28 日(水)</p> <p>15 : 30~17 : 30</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「新任転任教員研修会」 担当 中尾 浩史 ● 「メンタルヘルスとハラスメント」担当 榎本 秀一 <p>講師 岡山大学保健管理センター准教授 大西 勝 先生</p> <p>講師 岡山大学保健管理センター講師 清水 幸登 先生</p>
14	<p>平成 21 年</p> <p>12 月 9 日(水)</p> <p>16 : 00~17 : 30</p>	<p>【テーマ】 「創薬科学科教育考」</p> <p>— 創薬科学科教育の過去・現在・未来 —</p> <p>【話題提供】 薬学部 F D 委員会委員長 竹内 靖雄</p> <ul style="list-style-type: none"> ・創薬科学科教育の足跡 ・創薬科学科教育の問題点 ・創薬科学科の将来展望 ・創薬科学科の D P → C P → A P

15	<p>平成 21 年 12 月 17 日(木) 16:00~17:30</p>	<p>●学生参画フォーラム テーマ 授業評価アンケートを創ろう 対 象 薬学部 2 年次生 方 法 スモールグループディスカッションにより新授業評価アンケートを創る。 連 絡 薬学部学生・教員FD検討会 杉本 幸雄</p>
16	<p>平成 22 年 7 月 14 日(水) 15:30~18:30</p>	<p>● 「新任転任教員研修会」 担当 杉本 幸雄 ● 【テーマ】 大学院教育におけるFDを考える 【話題提供】 薬学部FD部会長 榎本 秀一</p>
17	<p>平成 22 年 11 月 25 日(木) 16:15~18:00</p>	<p>【テーマ】 「そんな(に)授業をしたいですか!？」 — 授業仕分けの進捗状況 — 【話題提供】 薬学部教務部会長 竹内 靖雄</p>
18	<p>平成 23 年 4 月 27 日(水) 14:20~16:20</p>	<p>【テーマ】 「東北では、今。薬学教員としての現場からのレポート」 【話題提供】 名倉 弘哲</p>
19	<p>平成 23 年 6 月 10 日(金) 16:15~17:45</p>	<p>【テーマ】 「授業改善論: 1、2 年生によるSGD」 【タスクフォース】 薬学科 1 年: 田中 智之、薬学科 2 年: 上原 孝、創薬科学科 1 年: 井上 剛、創薬科学科 2 年: 竹内 靖雄</p>
20	<p>平成 23 年 9 月 14 日(水) 16:00~18:00</p>	<p>【テーマ】 「授業改善論」 新任教員FD研修(FD部会・田中 智之) 【話題提供】 教養教育科目の開講の現状(教務部会長・竹内 靖雄) シラバスと成績評価(FD部会長・田中 智之) 授業改善論(学生、教員アンケートをもとに)</p>
21	<p>平成 23 年 10 月 5 日(水) 16:00~17:30</p>	<p>【テーマ】 「授業改善論 2」 【話題提供】 授業改善論(学生、教員アンケートをもとに) 成績不振者への対応(教務部会長・竹内 靖雄) 新国家試験の対応は?(同上・竹内 靖雄)</p>
22	<p>平成 23 年 11 月 30 日(水) 16:00~18:00</p>	<p>【テーマ】 「大学院教育FD・第 2 回」 【話題提供】 ハラスメント防止に関する講習会(杉本 幸雄) ハラスメント事例について(学部長・森山 芳則) 大学院におけるFDを考える(副研究科長・榎本 秀一)</p>
23	<p>平成 24 年 2 月 8 日(水) 16:00~18:00</p>	<p>【テーマ】 入試を考える 【話題提供】 博士前期課程入試の制度と現状(入試委員長・宮地 弘幸) 学部入試を考える(薬学入試部会長・勝 孝) 入試区分別に解析した学生の成績変化(教務部会長・竹内 靖雄)</p>

24	平成 24 年 4 月 25 日(水) 16:00~18:00	【テーマ】 研究倫理 【話題提供】 FD 部会長・田中 智之
25	平成 24 年 5 月 23 日(水) 16:00~18:00	【テーマ】 研究倫理 2 【話題提供】 FD 部会長・田中 智之、教務委員長・竹内 靖雄
26	平成 24 年 6 月 20 日(水) 16:00~17:30	【テーマ】 研究倫理 3 【話題提供】 FD 部会長・田中 智之
27	平成 24 年 10 月 16 日(火) 16:00~18:00	【テーマ】 「岡山大学の薬学教育を考える！！」 【話題提供】 講師 錦織 宏(京都大学医学研究科医学教育推進センター)
28	平成 24 年 1 月 9 日(水) 16:00~19:00	【テーマ】 「人材への社会ニーズと競争力」 【話題提供】 講師 安西 智宏 (東京大学薬学研究科ファーマコビジネスイノベーション) SGD・発表を実施
29	平成 24 年 1 月 29 日(火) 16:00~18:30	【テーマ】 「薬学部における人材育成のあり方とは？」 【話題提供】 狩野 光伸
30	平成 25 年 7 月 29 日(月) 16:00~18:30	【テーマ】 「薬学のディシプリン」 【話題提供】 古矢 修一先生 前) 武田薬品工業株式会社医薬研究本部リサーチフェロー 現) 岡山大学リサーチ・アドミニストレーター (URA)
31	平成 25 年 10 月 1 日(火)	【テーマ】 「企業の医薬研究開発に従事して 33 年」 【話題提供】 加藤 泰己 ナノキャリア株式会社 取締役 CSO
32	平成 26 年 1 月 30 日(木)	【テーマ】 「外資系製薬企業における実践」 【話題提供】 相徳 泰子 バイエル薬品 (株) マーケットアクセス本部 本部長代理
33	平成 26 年 3 月 19 日(水)	【テーマ】 「平成 27 年度新カリキュラムの実施に向けて」 【話題提供】 竹内靖雄, 黒田 照夫, 須野 学 (教務委員会)
34	平成 26 年 5 月 16 日(木)	【テーマ】 「アジアの薬学教育：AASP と国際連携」 【話題提供】 菅家 甫子 (かんげ もとこ) アジア薬科大学協会 (Asian Association of Schools of Pharmacy (AASP)) 専務理事 共立薬科大学名誉教授、慶應義塾大学薬学部客員教授、
35	平成 26 年 7 月 1 日(木)	【テーマ】 「薬学の倫理教育を考える」 【話題提供】 川村 和美

		シップヘルスケアファーマシー東日本株式会社 教育研修部部長
36	平成 27 年 3 月 5 日 (木)	【テーマ】 平成 27 年度新カリキュラムの概要と平成 28 年度新カリキュラムの立案に向けて (平成 25, 26 年度新人教員 F D 研修会を兼ねる) 【話題提供】 竹内靖雄 (教務・F D 委員会)
37	平成 27 年 9 月 25 日 (木)	【テーマ】 新カリキュラムに向けた薬学教育考 ー 学力保証と成績評価についてのワークショップ ー 【話題提供】 竹内靖雄 (教務・F D 委員会)
38	平成 27 年 11 月 2 日 (月)	【テーマ】 薬学教育改革セカンドステージ 【話題提供】 中村 明弘 昭和大学薬学部 薬物療法学講座薬剤学部門 教授
39	平成 27 年 11 月 27 日 (月)	【テーマ】 学生支援に活かすコーチング 【話題提供】 野呂瀬 崇彦 北海道薬科大学薬学部 薬学教育分野 准教授
40	平成 28 年 2 月 24 日 (月)	【テーマ】 第 5 期科学技術基本計画の概要 ～科学技術イノベーションで大変革時代を切り拓く～ 【話題提供】 中川 健朗 内閣府大臣官房審議官
41	平成 28 年 3 月 17 日 (木)	【テーマ】 薬学教育の過去・現在・未来 ー 学部入試から大学院入試まで ー 【話題提供】 竹内教務委員長, 黒崎教育担当副学部長, 山下入試委員長, 田中教授
42	平成 29 年 2 月 16 日 (金) 16 : 15 ~ 18 : 00	「新しいモデルコアカリキュラムに基づく薬学臨床教育」 【話題提供】 鈴木 匡 名古屋市立大学大学院 薬学研究科, 臨床薬学教育研究センター教授
43	平成 29 年 3 月 16 日 (木) 16 : 20 ~ 18 : 00	「学生のメンタルヘルス」 【話題提供】 清水 幸登 岡山大学保健管理センター准教授
44	平成 29 年 10 月 17 日 (火) 16 : 30 ~ 18 : 00	「ライフサイエンス研究分野におけるコーチングの必要性」 【話題提供】 竹本 佳弘 東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科・生命理工学系 専攻疾患予防科学コース 特任教授
45	平成 30 年 2 月 9 日 (金) 16 : 30 ~ 18 : 00	「薬学英語プレゼンテーションスキル講座」 【話題提供】 フィリップ ホーク (Hawke, Philip) 静岡県立大学 薬学部 科学英語分野 准教授
46	平成 30 年 3 月 20 日 (火) 16 : 00 ~ 17 : 30	【テーマ】 薬学教育の過去・現在・未来 (2) ー 学部入試から薬学教育評価まで ー 【話題提供】 竹内教務委員長・薬学教育評価委員長, 黒崎教育担当副学部長

5. おわりに

過去（2008～2011）のFD白書と現状を対比することで、問題点・改善すべき点を整理する目的で本白書を作成した。

当時、ちょうど改善に着手し始めていたシラバスについては、現在ではかなり整備が進んでいる。全学的にアクティブラーニングの推進がうたわれ、その割合を記入する欄が設けられるなど、教育実績のエビデンス化・データベース化に活用されている側面もないではないが、事業の目的・到達目標・授業計画・成績評価方法など必要な項目が整備され、またそれぞれの記入方法についても統一が図られている。

同僚評価についても、授業ライブラリの構築によって任意のタイミングで実施できる環境が整ったことは大きな進展である。ただし、実施率については高いとは言えず、特に教授法改善が必要と思われる教員にいかん視聴してもらおうかについて、知恵を絞る必要がある。

一方で、過去を見習った方がいい点として、教員と学生が共同してFDに取り組んでいたことが挙げられる。授業改善のための情報として学生からの評価の重要性は論を俟たないが、学生から話を聞くと、授業評価アンケートに回答することに意義を感じない（授業改善につながると思っていない）者も一定数いるようである。また2011年度版FD白書（追補版）によれば、薬学科学生の25%が卒業研究に意義を見出していないとのことであった。現在は同様のアンケートを実施していないが、薬学科学生の研究室配属理由で「研究活動にあまり時間を拘束されない」が毎年上位に来ることを鑑みると、過去と現在で学生の意識にはあまり差が無いように思われる。いずれの場合も、教員と学生の意識の乖離が根底にあると考えられる。教員も学生も学部構成員であるという意識の下、教育環境・スタンスの理想像を共有し、その実現に向けてお互いに努力するための活動を行っていく必要がある。